

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：47122

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03041

研究課題名(和文) 日本人大学生の英語産出力の測定：語学留学は英文法知識の自動化につながるのか

研究課題名(英文) Measuring English production of Japanese university EFL students: Can short-term study abroad experiences lead to automatization of English grammar knowledge?

研究代表者

徳永 美紀 (Tokunaga, Miki)

福岡女学院大学短期大学部・英語科・講師

研究者番号：30461479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1ヶ月程度の短期海外語学留学が大学生の英語発信力に効果をもたらすことができるかを、留学前後にいくつかのテストを実施することで検証した。結果、産出の正確さにおいては統計的に有意な効果はみられなかった。産出の流暢さにおいては統計的に有意な伸びがみられたものの、帰国後でも1分間の発話語数平均は顕著に少なく、「流暢になった」とはいえない。個人差においては、留学前の英語力が高い学生、授業外でホストファミリーや他国からのルームメイトと積極的に交流をもった学生が伸びる傾向がみとめられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

短期語学留学に関する報告書や研究は、参加者の「異文化理解」や「英語学習へのモチベーション」への影響を検証するものが多いが、参加者は「英語力向上」も期待しているはずであるし、多くの大学ではこうしたプログラムへの参加によって「英語」の単位が与えられている。しかし、本研究結果でも明らかのように、短期語学留学での英語力の伸びは本人の努力なしでは難しい。留学すれば英語が話せるようになる、という思い込みを払拭し、事前の英語学習、研修中の積極性の重要性へ理解が必要であると考え。コロナ禍、留学が難しい状況であるが、再開できた際に短期間でも高い効果が期待できるよう、普段の英語学習に力をいれる事が望まれる。

研究成果の概要(英文)：This study examined whether short-term overseas language training of about one month can have an effect on the English proficiency of Japanese university EFL students. We administered several tests before and after their study abroad experiences. The results showed that there was no statistically significant effect on accuracy of production. While there was a statistically significant increase in production fluency, the average number of words per minute uttered was remarkably low even after the study abroad experience, and the students were far from being "fluent". In terms of individual differences, students who had a higher level of English proficiency before studying abroad, and students who actively interacted with their host families and roommates from other countries outside of class had the tendency to improve.

研究分野：英語教育

キーワード：短期語学研修 短期留学 英語力 正確さ 流暢さ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本学生支援機構の2019年のデータによると、大学生の海外留学生の数は伸び続け、2017年度は10万人を超えた。そして、その6割以上が1ヶ月未満の短期留学への参加者であった。大学の長期休暇中に参加する事で卒業への影響もなく、短期である事から費用も比較的安く、留学前の語学力の条件が無いプログラムが多い事から、海外旅行感覚で気軽に参加できることが人気の原因であると考えられる。

こうした人気に伴い、短期留学に関する研究も行われるようになったが、その多くは短期留学による学生の英語学習へのモチベーションや異文化理解能力に関する主観的な感想をまとめたものが多く (Fujioka & Agawa, 2007; Furuya, 2005; Geis & Fukushima, 1997; Harris, 2014; Horness, 2014 など) 英語力そのものに関する効果についての研究は少ない (DeKeyser, 2007)。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3点である。

- (1) 短期語学留学は英語力に効果があるのか
- (2) 効果があるとすれば、流暢さ、正確さなど、どのような効果がどれだけあるのか
- (3) 効果には何が影響していると考えられるか

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究協力者

研究協力者は福岡市内の4年制大学の複数の学部にも所属し、短期留学を予定している学生20名(女子16名、男子4名)であった。協力者の出発前のTOEIC平均スコアは530点で、大学生としては平均的な英語レベルであるといえる。研究協力者は出発前にTOEIC IPを受験し、出発前に2回、帰国後に2回、研究者の指定する期間内で都合の良い日時に、個別で複数のテストを受験してもらった。その謝礼として、協力者にはTOEIC IP受験料の返金と、5千円のQuoカードが支給された。

#### (2) 留学先と期間

留学先は英国、アメリカ合衆国、シンガポール、マルタ島、ニュージーランド、オーストラリア、カナダで、期間は3週間が14名、4週間が5名、5ヶ月が1名であった。5ヶ月滞在した研究協力者は、帰国時期不明という状態で出発し、最終的に長期留学になってしまったが、当該学生のデータを含めても統計的な影響がなかった為、データとして削除はしなかった。最終的な論文には含まない予定である。この学生を除いた協力者は、全員大学が企画したプログラムへの参加者であり、必修英語科目の単位がとれるプログラムも含まれていた。

#### (3) 留学先での環境

プログラムや留学先によって、現地での授業や放課後のアクティビティ内容は異なり、現地でレベル分けをして他国からの学生とともに学習したプログラムと、所属大学用の特設授業を同大学からの日本人学生のみで受講した「隔離型」プログラムがあった。滞在先も、多国籍のハウスメイトがいたホームステイ、日本人ルームメイトとのホームステイ、同大学からの日本人ルームメイトと大学の寮に滞在したケースなどがあった。

#### (4) 実施テスト

協力者に対して実施したのは、留学前後のアンケート、英文法産出の正確さを測定する為の文法性判断テストと短文日英翻訳テスト、そして英文産出の流暢さを測定する為の絵描写テストおよび英語ネイティブスピーカーとの会話テスト(Standard Speaking Test)であった。

##### 文法性判断テスト

日本語訳付きの英語の短文を読み、その英文が文法的に正確であるか、間違っているかを判断し、間違っていると判断した場合は訂正するという形式で、18の文法項目(3単現のS、*enjoy + ing*、*go + ing*、It主語、*Since/For*、WH疑問文、Yes/No疑問文、過去、関係節、間接疑問文、現在完了、進行形、接続詞、前置詞、否定、付加疑問、複数のS、不定冠詞)を対象とした。テストは訂正の必要のある21文を含む25文から成り、判断と訂正においてデータ分析を行った。このテストでは留学前後で同じ問題を使用した。

##### 短文日英翻訳テスト

文法性判断テストで使用された文法項目に、依頼と定冠詞を加えた20の文法項目が、日本語から英語の筆記翻訳テストで正確に使えているかを検証した。テストは13文で、1文に複数の文法項目が含まれる為、41項目を採点対象とした。例えば：

その黒い帽子をかぶっている女性はAnnaです。

The woman who is wearing the black hat is Anna.

という1文には定冠詞が2つ、関係節が1つ、進行形が1つ含まれるため、対象項目が4つある。翻訳テストの分析は、文法項目ごと(N = 41)と文ごと(N = 13)に行った。このテストは、留学の前後で同じ項目を含む異なる文を使って行った。

#### 絵描写テスト

矢印でつながれた6つの絵(図1)を見て1分間ストーリーを考え、その内容を英語で話すというものであり、口頭で行った後、筆記でも書いてもらった。6つの絵は、語学留学をする研究協力者に親しみやすい内容になるよう作成し、留学前後で同じ物を使用した。発話は協力者の同意のもとに録音し、書き起こしてから分析を行った。筆記は参考までに文法の間違い等を記録したが、結果分析には使用していない。

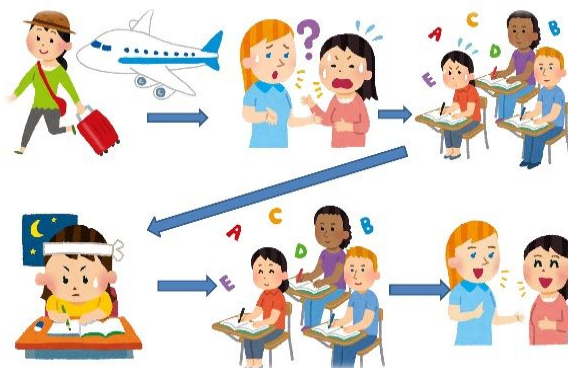


図1：絵描写テストで使用した絵

(フリー素材「いらすとや」を使用)

#### Standard Speaking Test

会話テストに使用した Standard

Speaking Test (SST)は、American

Council on the Teaching of Foreign Language の ACTFL テストを日本人英語学習者のレベルに合うよう調整された物である。試験官が受験者のレベルに応じて内容を変化させる約15分間のインタビューテストで、Text Type(発話文の複雑さ)、Comprehension(試験官の発話の理解度)、Communication(自分から質問するなど、会話を続けようとする態度)、Grammatical accuracy(全体的な文法の正確さ)、Pronunciation(発音)、Fluency(全体的な流暢さ)において評価される。本研究では、SSTの面接官、採点者の資格を持つ英語ネイティブスピーカーがインタビュー及び採点を担当した。インタビューは協力者の同意のもとで録音し、採点者は1週間以上間を空けたうえで2度採点を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 文法性判断テスト

文法性判断テストでは英文の正誤を判断し、間違った英文を訂正するという形で文法の知識が問われた。出発前、正しい判断ができた数の平均は25文中17.45、21の間違った文中で正しく訂正できた数の平均が12.45であったのに対し、帰国後のそれぞれの平均は17.65と13.05で、数値的には少し上昇しているものの、統計的に有意な変化はみられなかった。

	留学前		帰国後		t	d.f.	p	d
	M	SD	M	SD				
判断 (25 sentences)	17.45	3.71	17.65	4.42	-0.25	19	0.81	0.05
訂正 (21 items)	12.45	4.03	13.05	4.4	-1.08	19	0.29	0.14

表1：文法性判断テスト

##### (2) 短文日英翻訳テスト

翻訳テストでは13の短文を日本語から英語に翻訳する際、含まれる41の項目が正しく使用されているかを検証した。その結果、留学前に正しく使用できた項目平均が34.1であったのに対し、留学後は33.7と平均が下がってしまった。これは、同じ項目を含んでいたものの、留学前後で違う文を使用した事が原因であると考えられる。しかし、この平均の低下は統計的に有意で

文法項目 (41 items)	留学前		帰国後		t	d.f.	p	d
	M	SD	M	SD				
	34.2	5.49	33.7	4.61	0.94	19	0.36	0.1

表2：短文日英翻訳テスト

はなく、短期語学留学は短文翻訳における英文の正確さに有意な効果はなかったといえる。

### (3) 絵描写テスト

絵描写テストでは、録音した発話の 11 の構成要素（音節の数、1 秒毎音節数、発話の長さ、停止回数、合計停止秒数、停止秒数の平均、発声時間比率、使用した単語の種類、使用した単語の総数、総語数中の異なり語率、1 秒毎語数）を記録し、留学前後で比較した。その結果、統計的に有意な変化があったのは Phonation/Time Ratio (発声時間比率) のみであった。Phonation/Time Ratio は流暢さを表す数値として使用される事が多いため、グループ平均として絵描写テストにおける流暢さが伸びたという結果となった。しかし、Phonation/Time Ratio の 0.55 という数値は「流暢」には程遠く、あくまでも出発前と比較して流暢さが増したということである。

	留学前		帰国後		t	d.f.	p	d
	M	SD	M	SD				
# of Syllables	111.35	48.76	116.2	51.46	-0.47	19	.64	0.10
Syllables/Second	1.12	0.31	1.18	0.40	-0.92	19	.37	0.18
Total Length	108.52	54.96	105.43	50.38	0.24	19	.81	0.06
# of Silences	31.15	14.68	29.05	14.67	0.59	19	.57	0.14
Total Silence Length	61.02	42.58	49.08	29.43	1.52	19	.15	0.33
Mean Silence Length	1.85	0.93	1.73	0.72	0.81	19	.43	0.14
Phonation/Time Ratio	0.48	0.15	0.55	0.13	-3.44	19	.00*	0.51
Types	38.90	13.59	41.20	13.76	-0.82	19	.42	0.17
Tokens	82.25	37.73	86	39.85	-0.44	19	.66	0.10
Type/Token Ratio	0.49	0.08	0.50	0.07	-0.18	19	.86	0.13
WPM	49.31	13.61	52.07	17.77	-0.90	19	.38	0.17

表 3：絵描写テスト

### (4) SST

SST においては、評価された前述の 6 つのポイントの平均を留学前後で比較した結果、Accuracy（全体的な正確さ）と Fluency（全体的な流暢さ）に統計的に有意な伸びが確認された。SST における正確さとは、特定の文法項目が正確に使えているのかを評価するのではなく、発話中のエラーの難易度や、内容に影響するかといった全体感での評価である為、本研究の他のテストにおける文法の正確さとは異なる。

	Before		After		t	d.f.	p	d
	M	SD	M	SD				
Text Type	3.53	0.38	3.67	0.55	-1.2	19	.24	0.30
Comprehension	3.92	0.59	3.98	0.63	-0.61	19	.55	0.10
Communication	3.25	0.56	3.37	0.69	-1.29	19	.21	0.19
Accuracy	3.2	0.35	3.35	0.42	-3.74	19	.00*	0.39
Pronunciation	3.57	0.53	3.42	0.42	1.58	19	.13	0.31
Fluency	3.07	0.48	3.26	0.57	-2.47	19	.02*	0.36

表 4：SST

### (5) 個人差

上記の結果は 20 名の協力者の平均値を比較したものであり、個人間には差がみられた。絵描写と SST における流暢さの伸びに注目して個人を比較すると、比較的伸びの大きかった協力者は、ホストファミリーや日本人以外のハウスメイトやルームメイトと積極的に交流をしていた事がわかった。流暢さが最も低下した協力者は、同大学からの参加者用「隔離型」授業を受講し、寮で日本人学生と同室という環境であった。

さらに、出発前の TOEIC スコアと SST における流暢さの伸びに相関関係が確認され、出発前にある程度英語力をつける事で、現地で積極的にコミュニケーション活動ができると考えられる。

## (6) 考察

本研究の結果、文法性判断テストや短文翻訳テストによる、英文法の知識や産出の正確さの平均において、短期語学留学による効果は認められなかった。しかし、絵描写テストおよび SST による産出の流暢さの平均にはわずかな伸びがみられた。個人差においては、出発前の TOEIC スコアの高さ、寮ではなくホームステイであったこと、日本人以外のルーム・ハウスメイトがおり、積極的に交流を持った事が流暢さの上達に影響を及ぼしたと考えられる。

短期語学留学に関する研究は、参加者の「英語学習へのモチベーションの変化」や「異文化理解」などに関する主観的なアンケートやインタビューにおいてポジティブな結果を示す物が多い。語学力以外の点も確かに留学の魅力ではあるが、参加者や経済的サポートをしている家族は、英語力の向上も期待しているであろう(Horness, 2018 など)。そのため、大学等が短期語学留学を企画する際は、目的や期待できる効果を明らかにすべきであるし、単位修得プログラムである場合は、それが語学の単位であるべきかを検討する必要もあるだろう。

### <引用文献>

- ACTFL (2018). <https://www.actfl.org/>
- Geis, H & Fukushima, C. (1997). Overview of a study abroad course. *The Language Teacher*, 21, 15 - 20.
- DeKeyser, R. (2007). Study abroad as foreign language practice. In R. DeKeyser (Ed.), *Practice in a second language: Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology* (pp. 208 - 226). Cambridge University Press.
- Fujioka, K., & Agawa, T. (2007). Motivating learners through special activities in a study abroad program. In K. Bradford-Watts (Ed.), *JALT 2006 Conference Proceedings*, 918 - 930.
- Furuya, N. (2005). Evaluating a short-term study abroad program. *Journal of Bunka Women's University The humanities & social sciences*, 13, 19 - 30.
- Harris, J. (2014). The effects of short-term study abroad on the attitudes of Japanese university students toward using English and on the development of cross-cultural understanding, *Kinki University Center for Liberal Arts and Foreign Language Education Journal. Foreign Language Edition*, 5(1), 89 - 112.
- Horness, P. (2014). A social narrative inquiry of three Japanese university participants in a short term study abroad program. *Ryūgaku: Explorations in Study Abroad*, 7, 24 - 37.
- Horness, P. (2018). Student survey responses from a short-term study abroad program. *Ryūgaku: Explorations in Study Abroad*, 11, 2 - 27.
- 日本学生支援機構(2019) 日本人学生留学状況調査  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Miki Tokunaga
2. 発表標題 Effects of short-term study abroad on Japanese university students' English abilities
3. 学会等名 55th RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miki Tokunaga, Sachiyo Hayashi
2. 発表標題 Effects of short-term study abroad on Japanese university students: Does it improve their English?
3. 学会等名 第58回JACET国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miki Tokunaga
2. 発表標題 Does short term study abroad improve Japanese students' English?
3. 学会等名 JALT Study Abroad SIG Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳永美紀
2. 発表標題 短期語学留学で大学生の英語は伸びるのか
3. 学会等名 第205回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳永美紀
2. 発表標題 大学生の短期海外研修はどのような効果があるのか：研修前後のテスト結果から
3. 学会等名 第184回JACET東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<a href="https://www.tokunagamiki.com/research">https://www.tokunagamiki.com/research</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 幸代  (Hayashi Sachiyo)  (00609464)	熊本学園大学・経済学部・准教授   (37402)	
研究分担者	Holster Trevor  (Holster Trevor)  (40612403)	福岡大学・教育開発支援機構・講師   (37111)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------